Osaka Shoin Women's University Repository

藤壺は変貌したか

久保　重

源氏が明石から帰京した翌年春、朱雀帝は位を十一才の東宮に譲った。源氏は内大臣に、致仕の左大臣は摂政太政大臣に昇り、共に新帝を補けて国政を担当する。逼塞していた太政大臣の子息達もみな浮上して、長男（頭中将）は権中納言の要職に就く。藤壺入道中宮は太上天皇に准ずる待遇を賜り院司が置かれる。この「澪標」以降の藤壺について、「桐壺」以来の源氏のひたすらな憧憬の対象としての存在たることを罷め、これまた浪漫的人物から政治家に変貌した源氏に力を籍す人物に変貌していると見る解釈が広く行われている。これと反対に藤壺は意識としては、政治的目的はないのだが、その身分環境から、結果として政治的色彩を帯びるのだとする見解も存在する。藤壺に付与されている人間像は、「桐壺」で初登場し、「朝顔」で死後源氏の夢に姿を見せるまでの総体を通して理解されるべきことは、云うまでもない。「澪標」藤壺変貌説も、その反対説も共にこの立脚点から打ち出された論と考えられる。私はそれと同じ視点から、「澪標」の藤壺に、それまで描き蓄えられて来た彼女の人物像と比べて、質的変革を見出さない読みが可能だと思うものである。物語の進展の途上、この時点で藤壺に政治的影響力を帯びさせる意図を作者が持ったとは思われないのである。私の感じるところでは、「澪標」の藤壺は、「若紫」以来の一貫した固有の性質を少しも変えず、風姿に一層尊貴な光彩を加え生涯最高の完成美を見せるのである。以下、「澪標」の巻を中心に、藤壺の人間像を作者がいかに造型しているかを探って見たい。

○

「澪標」で藤壺が変貌を示すと云われているのは、源氏が故六条御息所から後見を頼まれた前斎宮（後の秋好中宮）を、新帝の後宮に納れてはと推挙するのに答える彼女の次の言葉に関してである。彼女は言下に答えた。

「いとようおぼし寄りけるを、院にもおぼさむことは、げにかたじけなう、いとほしかべけれど、かの御遺言をかこちて知らず顔に参らせたてまつりたまへかし。今はた、さやうの

Osaka Shoin Women's University Repository

こと、わざともおぼしとどめず、御行ひがちになりたまひて、かう聞えたまふを、深うしもおぼしとがめじと思ひたまふる」（新潮日本古典集成「源氏物語」に拠る。以下本文の引用は同書に拠る。）

十一才の冷泉帝に、二十才の前斎宮を配しようという源氏と、それに忽ち賛意を示す藤壷とのどちらにも政略的意図を推察し、事を強行するために、藤壷は、朱雀院の前斎宮に対する懇望は知らなかったことにしようと、進んで源氏に知恵をつけると解すると、成程、これまでの、やさしくらうたげで言葉数の少なかった藤壷とは、変容を遂げている。しかし、藤壷の言葉を、源氏の政治的意図に同意したのでなく、彼女が彼女の独自の見解から、年長の后妃の不可欠性を感じていたのだと理解すれば、この言葉は、謂われる様な政治色を帯びなくなるだろうし、帝と前斎宮との年令差も別の目で見られるだろう。

確かに、源氏には政治的意図が先行している。彼には新帝補佐のために自身の政権の座を強固なものにし上げて行かねばならぬ責務がある。そのために後宮に女を入れて、――適当な女がないから養女を入れて、冷泉帝の外戚の地位を確保しなければならぬという政治的必須要件があった。現に競争者の権中納言の女は、新帝即位の年の秋入内して弘徽殿女御と呼ばれている。彼の唯一の持駒の前斎宮には、先帝朱雀院が執心を募らせている。源氏は前斎宮入内に母后藤壷の力をかることを思い立ったのだった。彼は藤壷に対面して、朱雀院の意向に背いては恐れ多いと思い煩っていること、一方また、故六条御息所の遺志を十分満足させるだけの後見を前斎宮のために果したいと思っている次第を縷縷と述べて

「……うちにも、さこそおとなびさせたまへど、いときなき御齢におはしますを、すこしものの心知る人はさぶらはれてもよくやと思ひたまふるを、御定めに」

と進言し、裁定をもとめた。源氏が冷泉帝のためを計っていることと、御息所の信頼に誠実に応えるべく、遺子前斎宮の前途の幸福を願っていることに偽りはないが、彼の内心に、言葉に現されない部分、後宮掌握という政治的願望が大きく根を張っているのは隠れもない事実である。藤壷にはそれらの要素が全部読み取れたであろうが、彼女は即座に冷泉帝の後宮に、年長の前斎宮を迎え納れることにきっぱりと賛意を表明する。次いで、その提案を実行する方法を教え、最後に、朱雀院に対して源氏がその意に反くことを深刻に思い煩わなくてもよかろうと慰める。藤壷が、これ程積極的に前斎宮入内を支持する理由については、作者が語り手に云わせている。それを見よう。

入道の宮、兵部卿の宮の、姫君をいつしかとかしづき騒ぎたまふめるを、大臣（源氏）の隙あるなかにて、いかがもてなしたまはむと、心苦しくおぼす。権中納言の御女は、弘徽殿の女御と聞こゆ。大殿の御子にて、いとよそはしくもてかしづきたまふ。上もよき御遊びがたきにおぼいたり。（兵部卿宮）宮の中の君も同じほどにおはすれば、うたて雛遊びのここちすべきを、「おとなしき御後見は、いとうれしかべいこと」とおぼしのたまひて、さる御け

Osaka Shoin Women's University Repository

しき聞えたまひつつ、大臣のよろづにおぼし至らぬことなく、公がたの御後見はさらにもいはず、明け暮れにつけて、こまかなる御心ばへの、いとあはれに見えたまふを、たのもしきものに思ひきこえたまひて、いとあつしくのみおはしませば、参りなどしたまひても、心やすくさぶらひたまふこともかたきを、すこしおとなびて添ひさぶらはむ御後見は、かならずあるべきことなりけり。

藤壷は、兄の兵部卿宮から、かねがね、その二女を入内させたいと依頼されていたのであった。それを云い出しそびれている処に、源氏から前斎宮の話が持ち出されたのであるが、藤壷は、この二十才の妃を後宮に納れようという提案を大層喜ぶ。帝の後見をする能力を持つ妃が加って、病身の自分の負担を軽くしてくれるのを嬉しいと思うのであるが、単にそれだけではない。藤壷の考えでは、冷泉帝は少帝であってはならないのである。元服を終えて即位した天子である以上、内外から軽く見られることのない様に身を保ってほしい。後宮が可愛らしい年少の后と遊ぶ場であってはならない。現状では冷泉帝の公人としての威信が保てないと、藤壷は憂えていたのであった。「うたて雛遊びの心地すべきを、大人しき御後見はいと嬉しかべいこと」と、姪よりも前斎宮の入内が差し当って望ましく、入内をたびたび催促し、提案してくれた源氏の配慮に感謝する。後宮の整うのを願う藤壷の心の奥には、後宮の理想像があり、更に、古代中国風の「天子」の理想像が存在していると推測することが許されるのではあるまいか。かつて「紅葉賀」で「唐人の袖振ることは遠けれど」と返歌して、源氏をして「ひとのみかどまで思ほしやれる御后言葉のかねても」と感動させた識見と、等質のものを、私は、この際の藤壷の裁定の根底に見出す。この後宮観を政治色を帯びていると解するならば、まさしくその通りである。しかし、それは、藤壷の「澪標」変貌説がいう政治色と同義ではない。藤壷は源氏の願望に迎合したのでなく、自己の識見に基いて前斎宮入内に賛成したのだと、私は云いたいのである。

○

冷泉帝即位直後に、致仕大臣は摂政太政大臣に、源氏は内大臣に昇任する。作者が、この源氏側の一門の浮上する新帝の政治体制成立の条に、藤壷の待遇を加えていないことに私は関心を持つ。新帝即位の後、物語は、夕霧の童殿上、源氏の二条東院造営、明石の姫君誕生、源氏宿曜の予言を信じる、明石に乳母派遣、明石の姫五十日の祝に源氏配慮を示す、源氏花散里を訪う、源氏新東宮との間柄良し、これだけの条を隔てて、藤壷の太上天皇に準ぜられることが語られている。作者は、藤壷に、「賢木」の巻に見た弘徽殿大后の向うを張る様な生生しい政治色を付けたくなかったのだと、私はこれを解釈する。作者は宮廷内の門閥の抗争・外戚の専権などとは全く別次元の世界で、藤壷中宮像を描こうとしていると私には感ぜられるのである。言い換えると、藤壷に、現実のそれとは別な理想的宮廷を脳裡に描くことの自由と、また、その理想世界に自分の在り方を位置づけ得る自由な環境を用意するために、作者が、上記の様な時点に藤壷の昇進を位置せしめたと考えられるのである。

Osaka Shoin Women's University Repository

これに比べると、源氏は新帝補佐という現実的環境に置かれている。彼の抱いている理想は、現実から離れるわけには行かない。彼は「明石」以前の彼とは打って変って、天皇の補佐役たるに相応しいスケールの大きい政治家として成長して行く。現帝の治世を古今東西第一級の聖代にし上げて行くことが目標であるが、宮廷内には細心の配慮を必要とする無数の現実がある。対抗勢力と友好関係を保つ一方、彼等に圧倒されないために、将来を見通して次々と先手を打って行かねばならない。権中納言が多子で男女とも持駒が多いのに対応して、自分も持駒を工面しなければならない。先帝の心証を害しない様に常に細心の心配りをしていなければならない。次代の天子たる皇太子の信頼を捉え、その後見役を、競争者に奪われない様に用心していなければならない。宮廷内外の信望を繋ぎ止めていなければならない。そのためにも、自家の勢力を伸展させ、常に優位を保ち、それを人目につく様にし向けることが必要である、等々。源氏は、帝の後見たることを罷めない限り、この気苦労の多い路線を歩む様に位置づけられているのである。

源氏とは対照的に、藤壷は、理想を追うことのできる環境にいる。では、彼女の理想として考えていた宮廷とはどの様なものであったかを考えてみたい。

「賢木」には漢籍の引用が目立って多い。その中、国政に関する個所には、殆ど「史記」が用いられている。「賢木」だけでなく「澪標」「絵合」「藤裏葉」でも、天子や国政に関する所には、「史記」が引用されている。「賢木」では源氏を周公旦に擬し、一方、弘徽殿大后と朱雀帝とには呂太后と孝恵帝に原拠が見出される様に描かれている。「絵合」の

さるべき節会どもにも、この御時よりと、末の人の言ひ伝ふべき例を添へむとおぼし、私ざまのかかるはかなき御遊びも、めづらしき筋にせさせ給ひて、いみじき盛りの御代なり

の背後には「史記」の五帝本紀の投影が見出される。作者は、この物語の第一部において、宮廷の理想形体にも、またその逆の形にも、「史記」に見える中国古代の宮廷に原拠を籍りていたと解される。また、藤壷女院の崩後、その仁慈を讃える記述（「薄雲」）には、その生前の人間像をも含めて、「文選」の「宋孝武宣貴妃誄並序」や「宋文皇帝元皇后哀策文並序」を連想させるものがある。

作者の、右の様な宮廷の理想についての思索の傾向は、藤壷の宮廷観に反映している。先ず、彼女はその様な思索や、それに適った身の処し方のできる人として設定されている。才能において資質において、彼女は他の女性登場者とは異った独自性を付与されている。彼女の威儀を帯びた后言葉、彼女の進退や判断の様式には、中国古代の宮廷を連想させるものがある。――というよりも、古代中国の后の儒教的理想形態を先に念頭において理解した方がわかり易いと思われる場合が屢々ある。「澪標」で彼女の朱雀院に関して云う冷徹な言葉が先ずそうである。中国の太后の後宮人事に関する発言であったら、これは賞讃に価する名言であり、年長の妃を採択するのもまた、その責務に適った正しく賢い処置である。

○

Osaka Shoin Women's University Repository

「絵合」の藤壷からも、私は政治色を引出せない。彼女の発案で、最初の絵合が催されたのであるが、帝付きの女房達が論評をしているのに興を誘われて、斎宮女御方の絵と弘徽殿女御方のそれとを合せて愉しもうとしたまでの、云わば、自然の成行から起った催であった。また藤壷が論争に口をはさんだのは、この第一回の催の場合だけで、結果としては左方の斎宮女御方を救ったことになるのかも知れないが、彼女が肩を持ったのは、「伊勢物語」そのものであろう。弘徽殿方の方人の大弐典侍が、初番の勝勢に乗って、「竹取物語」を「この世の契りは竹の中に結びければ、下れる人のことこそは見ゆめれ。ひとつ家の内は照らしけめど、百敷のかしこき御光にはならばずなりにけり。」と云い敗かしたのと同じ論法で、女主人公が宮中に入ったという点を強調して「正三位物語」を持ち上げ、「伊勢物語」を圧倒しようとするのを押えて、藤壷は

みるめこそうらふりぬらめ年経にし伊勢をの海士の名をや沈めむ

と判定した。「正三位物語」が散佚して伝わらない今日、それがどの様な作品であるかわからないが、「伊勢物語」は夙くから歌人に重んじられた歌物語であり、業平のみやびは恋する人の手本であった。藤壷の主張には何らの無理おしつけはなく、彼女の造詣の深さがうかがえるのみである。「伊勢物語」を右方のいう様な論拠で敗退させるわけには行かないのは、われわれが見ても当然である。百敷至上論は、いかにも帝付きの女房らしい発想であるが、藤壷の宮廷観とは知識・教養の上から雲泥の差がある。冷泉帝の側近の女房達の品性・教養は、藤壷にとっては重大関心事であったであろう。彼女は上の女房達が一辺倒に謳歌する浅薄な宮廷観とは対照的な、「宮び」をも諭したかったのかも知れない。

後宮は一夫多妻制である。その複数の后妃の中の誰かを、母后が特に愛したり支持したりすることは、後宮の秩序を保つ上から見て許されるべきでない。藤壷が、それを乱す筈はない。かの東三条院詮子でさえ、定子皇后・彰子中宮の片方を表立って特に支持した事はなかった。

藤壷の御前の物語絵合は、勝敗の結果が不明のまま終っている。本文には

かやうの女言にて、乱りがはしくあらそふに、一巻に言の葉を尽して、えも云ひやらず。

と記されて結末までに至らない。作者が春の一日の中宮の御前の遊びの一場面として扱ったと解してよかろう。藤壷が源氏と組んで行動したという様子は特に見当らない。

後宮の絵画熱に乗じて帝の御前での本格的な絵合を思い立ったのは源氏である。この第二回の絵合にも藤壷は臨席するが、後宴の際に人々に禄を出しただけである。予め、左右とも十全の絵集めをする。女御同士の競争というより、後見同士の競争である。敏腕家の権中納言は派手好みの性格から善美を尽した秀作名品を集め、一門も挙ってこれを後援する。朱雀院は好意を寄せる斎宮女御に、斎宮下向の大極殿儀式の様を描かせて贈る。藤壷は手出しをしない。絵を深く好む彼女の許にも秀逸があったことは十分察せられるが、

Osaka Shoin Women's University Repository

この際中立公正を保っていたのであろう。当日、勝敗はなかなかつかなかったが、最後の一番に、源氏の手に成る須磨・明石の絵日記が左方から出されて左が圧勝した。この催は、聖代の盛儀として冷泉帝の治世を価値づけると共に、また、斎宮女御の後宮での地位を推し上げる結果を招いた。源氏は一挙に、政道補佐の面と斎宮女御後見の面とで、目的を遂げたのであった。藤壺はそれを目のあたりにして満足を感じたであろうが、源氏の功の助力者ではなかった。須磨・明石の絵巻は、源氏が帝に奏上して、藤壺に贈られた。「賢木」以来の藤壺―東宮―源氏の側の非運とそれに続く復権の物語は、この絵日記奉献で完結すると解されるが、もし藤壺が、源氏の政治目的に協力して、清涼殿の絵合の下ごしらえとして第一回の物語絵合を催したり、その際わざと左方を敗北から救って、斎宮女御支持の意図を示したりしたとすれば、源氏の絵日記献上に内在している微妙な抒情性は損われてしまうのではなかろうか。源氏が二条院において絵合の準備に旅の絵日記を選び出して感慨にひたる場面に、作者はこう述べている。

中宮ばかりには見せたてまつるべきものなり（絵合）

また、両度の絵合の済んだ後、宮廷内にその感激の余波の残っている頃、源氏が藤壺に須磨・明石の絵を献上する条には

「かの浦浦の巻は中宮にさぶらはせたまへ」と聞えさせたまひければ、これが初め、また残りの巻々ゆかしがらせたまへど、「今、次々に」と聞えさせたまふ（同）

とあって公的な絵日記献上と、それに当然含まれていた筈の源氏の私的感情が、場面を別にして書き分けられているのを注視したい。源氏が須磨・明石に引退した真の事情と、そこで経験したあはれ深い情感とは、藤壺だけが理解し藤壺だけが共感し得るものであった。二人が心を合せて擁護した東宮が無事に位に即き、三年目の春を迎えた今、謫居時代の絵日記を献上するのだから、双方ともに感慨が深い。作者の側から言っても、ここは何か一言あってもよい個所である。それだのに、上に見た通り、淡々と扱っているのは何故か。藤壺は今や、かけ離れて高い地位に在る人だから、源氏の私的感情を仄めかしたりしては非礼なのである。共同謀議どころではない。藤壺女院は遠く高き人なのである。

○

話は戻るが、朱雀院に関しての藤壺の言葉は確かに冷酷に過ぎる。中でも「かの御遺言をかこちて」というのに、ひっかかるものを感じさせられる。源氏が、藤壺に相談する際に何と云ったのか知らないが、御息所の遺言は、

「心細くてとまりたまはむを、かならずことに触れて数まへきこえたまへ」（澪標）

「……かけてさやうの世づいたる筋におぼし寄るな。」（同）

と云うものであった。「源氏が、前斎宮に対して好色心を抱くことなく、前坊の遺子という身分を堕すことのない様に結婚について後見してほしい。」と云っただけで、入内させてほしいと云う様な具体的指示はなかった。藤壺の言葉にわれわれが違和感を覚えるのは、前斎宮が朱雀院の後宮に入ることも遺托の範囲を外れるもので

Osaka Shoin Women's University Repository

ないからである。藤壺は、前斎宮を冷泉帝の後宮に入れることに決めた以上、それを促進する手段として方便の使用を提言したので、源氏が母御息所から自由委托された遺子の身の振り方の中の最高の一つを「遺托」として採択しようという考え方なのであろうが、朱雀院側から見れば瞞着である。しかし作者はあらかじめこの点について救いを用意している。語り手の述べる所によると、朱雀院は母御息所の生前、前斎宮を所望する意向を申し入れたのだが、御息所は受諾を渋っていたのだった。しかも、院の懇望を源氏に知らさないで、娘の将来を依託したのは、朱雀院に差し上げる意志がなかったと見てよいであろう。藤壺の提案する「かの遺言をかこち」は、正確性を欠く憾みは残るが、全くの偽りではない。朱雀院は、藤壺と源氏の密謀で前斎宮を横取りされるのではない。御息所が院を憚って断りそびれている内に病死してしまったのだとわかる様に、語り手に作者は予め述べさせてあったのだ。藤壺が、院について、「今はた、さやうのこと、わざともおぼしとどめず、御行ひがちになりたまひて、かう聞えたまふを、深うしもおぼしとがめじと思ひたまふる」と言う言葉は、朱雀院が病弱でその後宮に将来性がないという点を突いたもので、いかにも冷酷であるが、判断としては、的確且つ明晰である。彼女が朱雀院に対して悪意を抱いていたり、他に成心などの不純物を有っていないからこそ口に上すことが出来、院を問題外に排除することができたのである。源氏の方は、「さらば、御けしきありて数まへさせたまはば、もよほしばかりの言を添ふるになしはべらむ。」と旨く母后の賛成と協力とを取り付けた後も、「世人やいかにとこそ、憚りはべれ」などと云う。政治的な裏の目的があるので気が咎めるのである。

朱雀院の懇望に対する苦慮と前斎宮の幸福を願う後見としての配慮とが矛盾相克する心中の苦しさを訴える源氏の言葉が、こまごまと長いのに比べて、藤壺の回答は、純粋、簡潔、明快である。しかもその判断は全く的確で素速い。その上、果敢な実行力を伴う。彼女はこの様な明晰爽快な思考力と、和漢に通じる教養を併せ有っているのであった。これこそ彼女に作者の付与した無二の独自性であろう。幾多の関連因子が相克し矛盾錯綜する混沌たる現実に直面して、ためらうことなく最も重要な事物ただ一つを敏捷果敢に選び摂る非凡な選択能力と思考力とを、天子の母、准太上天皇という最高の地位に在って、後宮を理想化するために発揮したのが、この言葉であろう。

かつて「賢木」の巻で、藤壺は、桐壺院の崩後、執拗に迫り出した源氏をあくまで拒み通したのであったが、源氏が絶望のあまり出家してしまうかも知れないのを察知するや、彼に先手を打って、故院の周忌の後、法華八講結願の日に出家を遂げてしまった。その時の彼女の思考と実行の型が、「澪標」のこの場合のそれとよく似ている。

弘徽殿大后とその父右大臣の一派が権勢を専らにする苛酷な政情の下で、昔、皇后の位を藤壺に先じられた怨を返そうと、藤壺とその所生の東宮に大后方の圧力が日増しに加わる。その中で東宮の地位を守り通すには、源氏を出家に踏み切らせてはならない。東宮

Osaka Shoin Women's University Repository

のただ一人の後見として、藤壺は彼との連繋を確保していなければならない。その負い目の中で、彼の強引執拗な思慕から逃がれ切れるものでない。側近の王命婦さえ源氏の同情者である。弘徽殿一派の苛烈な眼が絶えず注がれている自分に、源氏との情事の噂が立てば――事実がどうあろうと噂だけで相手方には十分である。東宮の不利は目に見えている。漢の高祖の死後、戚夫人とその所生の王子如意が呂太后から受けた迫害に近い様な、無惨な運命さえ藤壺には連想される日々であった。藤壺を中宮の地位につけたのは、東宮の後見のために桐壺院が配慮して置いたものであったが、彼女は、今の進退谷まる苦境を切り抜けるには、自分が俗世を棄てるのが唯一の途だと判断し、誰にも相談せずに、最適の機をとらえて出家してしまう。この場合、彼女が選び採った唯一のものは、「東宮の御ため」――皇位継承第一順位者の地位をわが子の上に保全する必要性であった。「澪標」の場合も、藤壺が最優先させたものは、冷泉帝のために後宮を整える必要性であった。他の、人間性の自然から生じたもろもろの因子は、善悪美醜の拘りなく、惜しみなく切り捨ててしまう。この二つの場合に見られる藤壺の採択には、共通のパターンがある。徹底して理知的な見極めと、わが子に付与された王権の座を擁護しようとするひたむきな姿勢とである。私は、藤壺の採択のし方に、単なる母性愛とだけでは云い切れないものを感じる。それはまた、権勢志向でも、政治的意図でもない。その様な自然的人間的意志や感情を高く超えた世界、理想の聖天子像が藤壺の中に座を占めていたのでないかと私は想像する。

藤壺の人柄の変化を考えるなら「賢木」における出家決意の時点にそれを見出すべきである。彼女につかわれていた「あてにらうたげ」「あえか」「なつかしげ」といった浪漫的な語彙が使われなくなる。「澪標」の前斎宮入内決定の場面で見せる彼女の人間像は、「賢木」のこの場合のそれと質的に似ていることは既に見て来たところである。両者とも、この場合の変化は、既に先学によって云われている通り、藤壺の性格や性質そのものが変革したのではない。物語の進展に連れて、変化する主題に随って、人物の立場が激しく揺すぶられるために見せる変化――位相の変化である。出家決意までの彼女は、少な少なと、しかも、朧化して描かれ、われわれは、多くは、源氏のあこがれの心を通し感覚を通して、僅かづつその心深さを、限りなき匂わしさを感じたり、詠歌と僅かな言葉とから、透き影の様な人間像を造型して来たのだった。それが「賢木」で、また「澪標」で生彩を帯びて表に現れると、それまで彼女のイメージの中にわれわれが思い至らなかった様な理知の切れ味を見せるのである。たとえば、桐壺院崩後、三条の宮に移り住む藤壺の御帳のうちにまで迫って怨む源氏を、辛うじて拒み通した翌朝、源氏が身も世もあらぬ思を訴え、

「逢ふことのかたきを今日に限らずは今幾世をか嘆きつつ経む
御ほだしにもこそ」

と云うのに答え

「ながき世のうらみを人に残してもかつは心をあだと知らなむ」

Osaka Shoin Women's University Repository

とさらりと受け流す藤壺の頭の働きの冴えを見よう。源氏はその前々夜藤壺の身近かに近付いて、熱意をこめて藤壺に愛を訴えたが、藤壺が冷たくあしらったので、激しい悲しみに理性も失せ果てて、夜が明けても立ち去ることもせず、困惑した側近の女房に塗籠に下着姿のまま押し入れられて、日の暮れるまでの時を過したのだった。塗籠の戸をそっと開けて、屏風の蔭に移ると、そこからは藤壺の姿が垣間見されるので、現し心も失せて御帳の中に忍び入って、藤壺を引き寄せる。藤壺は源氏の手に上の衣を残して逃れようとするが、彼の手には髪が捉えられている。それでも藤壺は、遂に、源氏を拒み通して夜が明けた。源氏は思いつめた様子で上の歌を詠んだ。そして「生れ変り生れ変りして永劫に執念を残す私のために、あなたは極楽浄土に往生なされないでしょう」と怨み言をいう。藤壺は源氏の、恋が受けて貰えないのでこのまま死んでしまおうと思い詰めた怨み言に、「その様なお心はすぐ変るものと御承知下さいませ」と返歌した。二夜に亘るあれだけの苦難をくぐり抜けた疲労の最中に、源氏の熱情をさらりといなしてしまう灰汁ぬけした返歌をする彼女に、私は「賢木」や「澪標」で彼女が見せた採択能力と等質の切れ味を見出す。錯綜する混迷の中から最も必要とするものを敏捷に選び採る能力――云い換えると、困らせるものをさらりとさりげなく振り棄て排除する能力が、巧みに働いているのが見えるからである。そう云えば、「若紫」以後、源氏との密事から継起する懐妊・皇子（冷泉帝）誕生・成育する皇子の源氏との相似・何も知らない桐壺帝の寵遇……と、汗あゆる思いの打ち続く苦悩の中で、藤壺の生命と生活とを支えたものは、この冷静な選択能力であったであろうことは推測に難くない。桐壺院崩御後の苦難の累層する時期については上に見た通りである。私は彼女の生活の軌跡と密着してその特性を貫通する働きを、彼女のこの資質に見出すものである。本稿の書き起しに戻って云うならば、藤壺は「澪標」で変貌しないのである。「賢木」で見せる変化も、変貌ではない。「紅葉賀」で、源氏の青海波の舞について桐壺帝から「いかが見たまひつる」と聞かれて、「異にはべりつ」とさらりと答える彼女と、全く等質の品位と才とを見るからである。

藤壺の死後、源氏は紫の上に彼女の人柄を偲んで云う。

……いとけどほくもてなしたまひて、くはしき御有様を見ならしたてまつりしことはなかりしかど、御まじらひのほどに、うしろやすきものにはおぼしたりきかし。うち頼みきこえて、とあることかかるをりにつけて、何ごとも聞こえかよひしに、もて出でてらうらうじきことも見えたまはざりしかど、いふかひあり、思ふさまに、はかなきことわざをもしなしたまひしはや。世にまたさばかりのたぐひありなむや。やはらかにおびれたるものから、深うよしづきたるところの、並びなくものしたまひしを……

（……中宮は、宮中生活の間、私を安心のできる補佐役とお思い下さっていた。私も中宮をお頼り申し上げて、何かの折には、何事も御相談申し上げたが、表立って才気煥発という様な面はお見せにならなかったが、御相談甲斐があったし、ちょっとした事でも申し分

Osaka Shoin Women's University Repository

なくおこなしになった。この世にあれ程御立派な方がまたとあろうか。ものやさしくおっとりとしていられるが、深い教養が身についていられる点が比類もなくいらせられたのに……）

源氏は藤壺との間の秘事を隠して、わざわざ「御まじらひのほどに」と限定して話しているが、この言葉の終りの部分は、身近で、たしかに見た彼女の印象を語ったものと解され、これこそ、彼の心を永遠に占める藤壺の正体だと思ってよかろう。

源氏は、上に見て来た様な藤壺の採択によって、最も屢々、最も手痛く、排除せられて来た過去を忘れてはいないだろう。しかもその苦痛の経験をも含めて、「世にまたさばかりのたぐひありなむや」と讃嘆せずにいられないのだ。否、その経験の故にこそ、彼女の品性の高さを無類と感じ得るのであろう。「深うよしづきたるところの並びなくものしたまひし」造詣の深さと、「やはらかにおびれたる」女らしさとは、彼の目が捉えたところでは、矛盾しないばかりか、相互に映発しあって、見事に、比類なき女性像を形作っているのである。源氏の体験から発した藤壺評は、上に見た彼女の判断の冷やかさ、切り棄ての鋭さも、全く位相の変化に帰するもので、本質的変貌でないことを、われわれに語るものであろう。

○

藤壺の変貌を説くならば、死後源氏の夢に現れた彼女のすがたにそれを求めることができるかも知れない。

入りたまひても、宮の御ことを思ひつつ大殿籠れるに、夢ともなくほのかに見たてまつるを、いみじく恨みたまへる御けしきにて、「漏らさじとのたまひしかど、憂き名の隠れなかりければ、はづかしう、苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」とのたまふ。……なかなか飽かず悲しと思すに、夙く起きたまひて、所々に御誦経などせさせたまふ。苦しき目見せたまふと恨みたまへるも、さぞおぼさるらむかし、行ひをしたまひ、よろづに罪軽げなりし御ありさまながら、このひとつことにてぞ、この世の濁りをすすいたまはざらむ、と、ものの心を深くおぼしたどるに、いみじく悲しければ、何わざをして、知る人なき世界におはすらむを、とぶらひきこえにまうでて、罪にもかはりきこえばや、など、つくづくとおぼす。……（朝顔）

この物語の書かれた時代の人々は、夢の中に、死者の霊が訪れると信じていた。この場面も、藤壺の霊が実際に出現したと受け取って読むべきである。藤壺は、二人だけの大切な秘密を、源氏が紫の上に漏らしたことを怨むのである。自分達の大切な愛をあなたはもう大切にしてくれないのかと訴えるのである。藤壺はその大切なものを抱いて、中有をさまよっていたのであった。桜の頃なくなってからもう半年にもなるのに。源氏は彼女の今いる所を尋ねて行って罪を代って上げたいと思う。らうたげな姿を見たのであろう。藤壺はかつてその本心を源氏に打ち明けたことはなかった。死期の近いのを予感し生涯を振り返って「高き宿世、世の栄えも並ぶ人なく、心のうちに飽かず思ふことも人にまさりける身」と思い知るが、しかしそうと悟った時にも、臨終にも、彼女は孤高の姿勢を崩さなかった。宮廷も女院の位も肉体も取り去られた死後の世界で、彼女は

Osaka Shoin Women's University Repository

自分の本当の心に立ち返ったのである。源氏に愛情を抱きながら拒否し続けて来た彼女は、排除して来た自分の本心を初めて解き放したのであった。それは変貌というよりも人間性の回復といった方が適っているだろう。緊張せざるを得ない環境に置かれていた聡明鋭敏な女性が、自分に課せられた使命を誠実に果たすために選んだ生き方に於いて示したフェイスと、環境とそれに密着していた使命とが取り除かれた個人に立ち戻って見せるフェイスとの差だから、変貌とは云えない。どちらの藤壺も藤壺自身である。同一性に変化はないのであるが、心深い作者は、藤壺を賢后として死なせたままで終らせなかった。「桐壺」でこの物語に初めて姿を見せた頃の彼女――元服したばかりの光る源氏と「御遊びのをりをり、琴・笛の音に聞こえかよひ」心を通わせて楽しんだ若く幸福だった女御時代の彼女の延長線上に、藤壺をとり戻して、縹渺とした神秘の世界に、源氏の永遠の憧憬の対象として、時空を超えて残して置いたのであろう。

○

「河海抄」須磨の巻に、「入道の宮（藤壺女院）　男女にかきらす仏法の道に入をは皆入道と号するなり　藤原遵子（三条関白頼忠女円融院后）　天禄四年三月十九日落飾世号入道宮云々」と見える。右の「天禄四年」は誤で、「日本紀略」長徳三年三月の条に、「十九日癸未。皇后宮遵子出家。」、「小右記」の同年三月廿日の条に「余参皇后宮、昨日酉刻御出家、（以下略）」と見えるのに従うべきである。「河海抄」は「入道の宮」という呼称について注記したものであるが、「紀略」と「小右記」が当代の后でない遵子を「皇后宮」と記しているのは注目を惹く。「紀略」によると

天元五年三月十一日癸未。女御（遵子）従四位上藤原遵子。立為皇后。

正暦元年十月五日丁未。改中宮為皇后。以女御従四位下藤原定子冊為中宮。

長保二年二月廿五日癸酉。以女御従三位藤原朝臣彰子為皇后。号之中宮。即任宮司。以元中宮職為皇后職。

と記され、この最後の記事は「扶桑略記」には

長保二年二月廿五日、癸酉、皇后宮藤原遵子為皇太后、世謂之四条宮、同日中宮定子改為皇后宮、同日、彰子立中宮十三

と記されていて、「権記」の同日の記事中にも「皇后宮為（ママ）皇太后職、中宮職為皇后宮職、新后宮為中宮」と見える。天元は円融朝、正暦以降は一条朝の年号である。即ち、円融帝の皇后遵子は、帝の退位後も、花山朝を経て一条帝の正暦元年定子が中宮に立つまでは中宮、以後、円融法皇崩後も遵子出家後も、彰子が中宮に立ち、定子が皇后となった長保二年二月までは皇后であった。これは、藤壺が、桐壺帝の退位後、崩御後も、朱雀朝を経て冷泉帝の治世にも中宮と呼ばれているのと頗る似ている。一方、円融帝女御詮子は、一条帝即位に際して、天子の生母たる故を以って、皇后歴を経ずして皇太后となる。「記略」に

寛和二年七月五日辛未。以詔皇太后宮為太皇太后宮。以母儀女御藤原詮子為皇太后。

「扶桑略記」に

Osaka Shoin Women's University Repository

寛和二年七月五日以皇太后昌子内親王為太皇太后、年三十歳、
同日、以天子母后詮子為皇太后、年三十六歳、

とある。「源氏物語」の弘徽殿女御は、葵の巻で初めて「今后」と記され、その後は朱雀帝譲位後も「大后」と呼ばれている。天子の生母が、皇后歴なくして皇太后に為されたのである。即ち、物語の朱雀朝における藤壺中宮と弘徽殿大后との関係は、一条朝における中宮遵子と皇太后詮子との身分関係に準拠を見出すことが出来るのである。しかし遵子中宮が、藤壺のモデルであったとは云えない。「栄花物語」に、遵子は「素腹の后」と渾名されたと書かれている通り、御子を持たなかったのに対して、藤壺の生涯は東宮（冷泉帝）との母子関係が主軸を成している。詮子もまた、弘徽殿大后のモデルではない。詮子は道長のために身を呈して一条帝に内奏するなど、弘徽殿の国政容喙に似た事態が伝えられているが、作者は、「史記」に見える呂太后の剛毅専横と、その所生の孝恵帝の仁弱とに準拠したことを、作品中に明確に示している。桐壺院の崩後、藤壺・東宮・源氏に強引な外圧を加える人物として、漢の高祖の死後、戚夫人とその子如意とを虐殺した呂后を髣髴させる様な大后像を弘徽殿大后に形象化することが、物語の筋運びの上から必要であったのは勿論であるが、弘徽殿が皇太后になった事情が詮子を連想させるところから、詮子に対して非礼、ひいては一条帝に対する不敬になるのを要慎して国外にモデルを求めたとも考えられる。要するに、人物像に関しては弘徽殿は一毫も詮子を準拠としないのである。

藤壺は、皇太后の地位を弘徽殿大后が占めているので、中宮のまま女院号を賜ったのであり、皇太后詮子が出家して女院号を賜ったのと多少事情は異るが、今上の母儀に準太上天皇の待遇を賜ったという点で、東三条院詮子を準拠としていると考えられる。それのみならず、私は、前斎宮入内について源氏に協力する藤壺女院に、彰子立后について道長に力を藉した東三条院の投影を見出すのである。「栄華物語」（長保二）かゝやく藤壺の巻に

はかなく年もかへりぬれば、「今年は后に立たせ給べし」と云事世に申せば、此（彰子）御前の御事なるべし。（中略）女院（東三条院）にも、藤壺（彰子）の御方をば、殿（道長）の御前の、院にまかせたてまつると申そめさせ給しかば、いとやむごとなく恥しき物に思ひ聞えさせ給。

（日本古典文学大系「栄花物語」に拠る。）

と見え、「権記」長保二年正月の条には更に詳しく、

廿八日、丙午、早旦参内、此日蔵人頭正光朝臣、奉勅、詣女御御曹司伝之、左大臣（道長）立后宣命日、可令擇申之由、先日内々以此気色、可告大臣之由、蒙勅命、然而申自院（詮子）被伝仰可有便宜之由、先々伝事之人若有依違之時、或有失、百之輩如此、大事々定之後、無相談非唯当時喧華、如招後代誹謗、仍為救其難之事、未定之旨、所申也、上御諾之、先是大臣豫密々依院仰、所承給、今日依吉日、有此勅命也

と記されている。即ち、道長は、昨秋入内した女彰子の立后を、密かに東三条院を通じて一条帝にお願いし、帝が、立后の日を正式に御下問になったのに対して、女院の思召しに従うとお答えした。その様な御返答をしたのは、世人や後世の謗を避けるためであったと

Osaka Shoin Women's University Repository

いうのである。これは「澪標」の巻で、源氏が前斎宮入内について藤壺に密談する場面と非常によく似ていて、源氏が世の批判を気にするあたりなど正しくそのままである。

東三条院と道長の場合は、この彰子立后の結果、皇后二名・皇太后二名という空前の変則的な事態を招来する。また、これを契機に、道長の定子皇后・伊周・隆家等に対する夜叉の如き圧迫が展開するが、それも短期間で片が付き、道長は四人の女を次々と后に立て、長期に亘って天子の外戚の地位を確保し、摂関政治の黄金時代を築き上げる。源氏が冷泉帝の補佐者である様に路線を敷いたのは桐壺帝であった。彼はその遺命に随ったのであった。源氏が栄達を極めるのは、藤壺の死後、彼を実父と知った冷泉帝の配慮に依るものである。藤壺と組んで伸し上がったのではない。「澪標」の巻以後の源氏には、道長を準拠にした個所が、この斎宮入内の密議をも含めて数多く見出せるが、壮年期の男性美とか、行事や生活面の壮麗さに殆ど限られていて、部分的な性質のものである。それは、中宮彰子の女房であった作者の道長に対する遠慮乃至は敬意からというよりも、「源氏物語」という作品の性格が生んだ制限と解すべきであろう。

源氏が道長でない度合よりももっと強く藤壺は東三条院ではない。一条天皇の治世は、宮廷の私的要素が目立って増幅し、後宮が重大な政治的意味を担っていた。しかし、「源氏物語」第一部に描かれている宮廷は古代律令制の骨組みを保って居り、天皇中心の聖代意識が強く打ち出されている。「澪標」の巻で、源氏から前斎宮入内について相談をもちかけられて、藤壺がためらうことなく源氏の提案に賛成するのは、上に述べた通り、冷泉帝の後宮の体制を整えるのに最も適した人事だと判断したからであろう。この際朱雀院の心事を慮るのは私情的だと云えよう。物語絵合の場合も同じことが云える。左右いずれかの勝敗を念頭において公正な発言ができなければ、それは私情に明を蔽われたのである。両場面とも藤壺は毅然たる識見を見せる。感情に溺れて自身をも他人をも甘やかすことのないのが、若紫以来の彼女の特性であった。積極的な意志と直截単純な判断とをわれわれは彼女の言葉や行動に常に認めて来たものであった。理知と優雅は彼女の場合不思議に同義的な意味を持っている。「澪標」における藤壺変貌説が出るのは、「澪標」の前斎宮入内推進と「絵合」の斎宮女御方に勝たせる判を下した両場面を、彼女が、源氏の権勢拡充の目的に協力するものと解釈するところから発する。その解釈の根底には、東三条院の政治介入の事例が、道長の権勢拡充に力を仮した史実が連想されているようである。然し、東三条院は、善意から行動したとしても、その内奏は私情的である。彰子立后のために骨を折ったのは、道長に対する私情であって、藤壺の場合とは全く事情を異にするものである。藤壺は東三条院とは全く無関係に別個に虚構された人物なのである。一条帝の愛猫が産んだ猫児のために産養をした、実在人物の東三条院とは全く次元の異る仮空の最高女性なのである。

○

藤壺を描いている手法は、部分的には写実的と云えようが、総体

Osaka Shoin Women's University Repository

として見る時は極めて濃厚な理想性で貫かれていることがわかる。作者は、源氏の永遠の憧憬の対象として、未だかつて物語の世界に現れたことのない、硬質の教養と無類の魅力を具えた貴婦人を構想したのだと思われる。この意味において、私は藤壺変貌説に反対を唱えるものである。